［12］

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 楊　馳（よう　ち） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士（外国語教育学） |
| 学　位　記　番　号 | 外博第 29 号 |
| 学 位 授 与 の 日 付 | 2021 年 3 月 31 日 |
| 学 位 授 与 の 要 件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 学　位　論　文　題　目 | 近代二字汉字动词的形成与发展<br>――基于中日语言接触及词汇近代化视角的考察 |
| 論　文　審　査　委　員 | 主 査　教　授　沈　国威<br>副 査　教　授　山崎　直樹<br>副 査　教　授　玄　幸子<br>専門審査委員　名誉教授　荒川　清秀（愛知大学） |

# 論 文 内 容 の 要 旨

楊馳氏の博士学位請求論文『近代二字漢字動詞的形成與発展――基于中日語言接触及詞彙近代化視角的考察』（和文論題：近代二字漢語動詞の形成と展開――日中言語接触と語彙近代化の視点からの考察）は、下記のように、緒論と終章を含め、全 5 章で構成されている。章の下には節と項が設けられており、巻末に 101 頁からなる 2 つの付録がついている。

第一章 緒論
第二章 二字漢字動詞先行研究概観
第三章 調査結果與分析考察
第四章 近代中日間二字漢字動詞的形成與交流
第五章 終章
参考文献
図表一覧
附録 1：二字漢字動詞在各文献中的収録状況
附録 2：二字漢字動詞在『日本語歴史コーパス』中的収録状況

日本の近代語研究では、明治期に日本語の語彙は大きく変容し、語種の面では漢字語、品詞の面では名詞と形容動詞が著しく増えたことが一般的な認識である。それら急増した語彙については、これまで様々な視点から研究がなされてきた。しかし、従来の研究に関しては主に次のような問題点が指摘できよう。1、学術用語を中心とする名詞に焦点が当てられ、

形容動詞や二字漢語の形をするサ変動詞語幹などの用言（以下叙述語と呼ぶ）に関するものは少ない。２、特に二字漢語動詞について、若干の語に対して語の発生、普及と定着を考察するものがあるが、体系的な研究には至っていない。３、二字漢語動詞の多くは、漢字文化圏において共有されているが、共有されるまでのプロセスが解明されていない。楊馳氏の学位論文は、正に上記の問題点を解決しようとするものである。

楊馳氏の研究は、具体的に、以下のような目標を掲げている。

一、日中同形二字漢語動詞全体の数量、語構成、及び、各時代の各文献群における収録状況を把握し、語彙リストを作成し、研究の土台を築くこと。

二、代表的な語彙の語誌を考察し、該当する類義語群全体の発展経緯を整理すること。

三、共時的、通時的な考察を通じて、近代二字漢語動詞をめぐる日中間の語彙交流の詳細を明らかにすること。

本研究では、日中同形の二字漢語動詞（サ変動詞語幹）を対象とし、中国語の「単双相通二字語原則」（つまり同じ概念に対し、一字語と二字語の両方を用意すること）と日本語の「和漢相通二字語原則」（つまり同じ概念に対し、和語と漢語の両方を用意すること）の理論を用い、全数調査、文献調査、使用頻度調査等に基づく語誌記述、語源探究を行った。本研究で調査した文献は、主に日中両国の国語辞書類、近代知識人の著書、コーパス・データベース類、英華華英辞書類、英和和英辞書類及び蘭和辞書類などである。

以下、各章の内容を略述する。

序章では、研究背景、本研究の位置づけ、本研究の目的と意義、研究方法と研究資料、及び論文の構成を提示した。

第二章では、中国語と日本語における二字漢字語・二字漢字動詞の由来・語構成に関する先行研究を概観し、特に近代日中語彙交流に関する先行研究の問題点を指摘している。

第三章では、独自に抽出した日中同形二字漢語 2485 語を対象に、中国古典、近代英華辞典、日本国語辞典、日中両国の各種コーパスを利用し、大規模な出典調査を行った。調査結果を基に、考察対象語彙を語構成的に並列構造、偏正構造、動補構造、動賓構造、主述構造とその他の 6 つに分類し、それぞれが語彙体系における立ち位置を分析した。

第四章では、日中語彙の相互影響を借形語、借義語、刺激語に類型化し、それぞれの代表事例を取り上げ、近代における日中二字漢語の形成・展開・交流の実態を考察した。借形語からは、「考慮」「思考」「圧搾」「搾取」を、借義語からは、「同情」「同意」「成立」「遺伝」を、刺激語からは「解決」を取り上げ、検討を加えた。以下はその概要である。

**一、借形語**：「考慮」と「思考」は漢籍に見当たらないため、日本人が和語「思う」、「慮る」、「考える」より漢字を抽出し、和漢相通原則に従って作り上げた新漢語と考えられる。また、「考」は訓読みの「かんがえる（かむかふ）」の介入により、「思いを巡らす」、「頭を働かせる」といった漢籍になかった意味を獲得したことが判明した。

「圧搾」と「搾取」も中国古典語ではなく、江戸時代の蘭学者による造語と考えられる。当初は、両語とも物理的な「しぼりとる」という意味だけで使用されていたが、20 世紀初頭、「搾取」は労働運動の文献やプロレタリア文学の作品などで多用されるようになり、一般化した。その後また、日本書物の中国語訳によって「圧搾」と「搾取」が中国に伝来し、

定着した。ただ、「圧榨劳动者」（労働者を圧搾する）のような、いわゆる「圧搾」の政治的な使い方は、中国で派生した独自用法である。

**二、借義語**：「同意」は漢籍では「同じ意思・同じ心」という動詞目的語のフレーズとして使用されていたが、19 世紀に来華した西洋宣教師メドハースト、ロプシャイトなどによって agree、consent の訳語に当てられていた。しかし、その用法は当時の中国語に定着しなかった。逆に、日本の英和辞書はその用法を受け継いだ。日本で新しい意味を獲得した「同意」はまた、日本の書物や新聞雑誌の翻訳により、中国語に戻された。最初は主として名詞用法で、1910 年以降は動詞用法も出現した。

同じく、「同情」も、漢籍では「同一性質・同一情意」という動詞目的語フレーズとして使われていた。現代中国語・現代日本語における sympathy を表す意味は、19 世紀来華宣教師が「同情」に持ち込んだものだが、当時の中国語には定着せず、日本語で一般化した。20 世紀初頭、また日本語から中国語に還流した。

「成立」は、漢籍では「成人する、成育」の意味である。明治維新以降、「成立」は和語「成り立つ」より「出来上がる」という新しい意味が付与され、「国・政党の成立」などの表現で使われるようになった。中国語もこの新しい意味を受け入れ、「设立」（設立）、「创立」（創立）などと類義語群を形成し、現在に至る。

「遺伝」は「後世に残り伝わる（こと）」の意味として、漢籍で使用されている。江戸時代に、日本の蘭学医らによって、オランダ語の erfenis / erfelijke ziekten の訳語として使用され、「遺伝病」など医学・生理学の文脈で使われるようになった。また、加藤弘之の文章などの翻訳により、「遺伝」が広く使われるようになった。

**三、刺激語**：「解決」は「困難を排除し決断を出す」という意味で、古今を通じて一貫性がある。しかし、漢籍には「解決」と「問題」の共起が見当たらず、「問題」は漢籍ではもっぱら数学や科挙制度に関する文脈で使われていた。だが、近代日本語で「問題」の指す範囲が広くなったことで、「解決」と頻繁に共起するようになり、コロケーション関係を構築した。中国語の「解決」「問題」は日本語の影響を受けて初めて共起し、やがて定着した。

第四章の各節の最後に、その他の常用二字漢語動詞 70 語について、日中両国の初出書証、コーパスにおける使用頻度と語誌を提示した。

第五章では、結論と今後の課題を述べている。近代における漢語形容動詞の発達の原因や、その特徴などを検討した。さらに、形容動詞を取り上げる本課題の意義及び今後の課題についても論じている。

二字漢字動詞の形成と大規模な出現は 19 世紀末から 20 世紀初頭の時期である。語構成において、偏正構造が最も多く、並列構造はその次である。日本語において二字漢語動詞が創出される際に、漢籍、漢訳洋書及び英華辞典などがその資源となった。日本語で一般化した二字漢語動詞は、また中国語に大きな影響を及ぼした。

二字漢語動詞の研究は、漢字文化圏における語彙交流、日中近代語彙の語誌記述だけではなく、東アジア諸国の言文一致の実現、近代学習語彙の形成などの重要課題とも密接な関係がある。論文の本文では、70 数語について簡略的な語誌記述を行った。また、付録では全 2485 語について、漢籍をはじめ、各種文献資料における出典を調査整理した。今後日中両

言語のみならず、韓国、ベトナムの近代漢字語彙史や概念史など、近代諸学芸史の研究にも詳細な基礎資料となることであろう。また、日中の語彙習得、特に動詞と名詞のコロケーション研究にも寄与するものと考えられる。さらに、日中両国の辞書編纂にとっても貴重な情報である。

以上、各章で示したように、楊馳氏の論文は、二字漢語動詞の近代的発生と漢字文化圏における伝播、普及を中心に考察し、従来の近代語研究では、十分に検討されなかった学術用語以外の漢字語の問題を堅実な語源学、文献学の手法と豊富な日本語、英語の知識で、実証的に考察した。その範囲は、近代訳語、第二言語習得における語彙教育の問題を究明することにまで及ぶ。

楊馳氏の論文に見られた語源探求の場合、日中英という複眼的なアプローチは、近世・近代における東アジアの学術史を考える際には極めて有効な方法であると言える。

## 論 文 審 査 結 果 の 要 旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：沈国威、玄幸子、山崎直樹）は、楊馳氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうかを確認した。その結果、同氏は、一）必要単位（8 単位）を取得済みであり、二）博士論文のテーマと関連する分野で、論文 4 編（うち 2 編は査読有りの学会誌掲載論文）；三）口頭発表 8 回（うち国際学会 6 回、国内学会と院生フォーラム 1 回ずつ。ドイツ・エアランゲン大学の東アジア交渉学会 2019 年次大会、及び中国・蘇州大学、ドイツ・ボン大学、台湾政治大学での学会発表は、厳格な審査を経て、採択、或いは招待されたもの）を有し、四）博士論文聴聞会（令和 2 年 8 月 4 日）も終え、論文提出のすべての要件を満たしていることを確認の後、研究科委員会（令和 2 年 9 月 23 日開催）に報告し、同氏による論文提出の承認を得た。これを受けて令和 2 年 10 月 29 日に楊馳氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（令和 2 年 11 月 25 日開催）において承認された論文審査委員会（主査：沈国威、副査：玄幸子、山崎直樹、学外委員：荒川清秀）での審査に入った。

提出された中国語論文（本文 257 頁、参考文献等 14 頁、付録 101 頁）は、本報告書「1. 論文内容の要旨」において述べたように、厖大な語源資料をはじめ、中国典籍、江戸期以降の日本漢学文献、福沢諭吉、西周をはじめ、明治期啓蒙家の著述、翻訳、英華・英和辞書等の関連資料を徹底的に調査し、精密に検討していた。また参考文献にも記されたように最新の研究成果もふんだんに取り入れている。

楊馳氏の論文は、漢字文化圏における語彙体系の再構築と言語近代化の視点から二字漢字動詞について、語彙史・訳語史の研究にわたって実証的に考察する意欲的なものである。研究手法の堅実さは評価に値するだけでなく、これまでにややもすれば見落とされがちな

叙述語の問題を体系的に取り上げ、積極的に答えを出そうとするものであり、楊馳氏の研究者としての自覚の高さが窺える。

さらに次の3点からも、本学位請求論文は、優れたものと判断できる。

（１）文化交流、言語接触に起因された語彙の環流を見据えた問題意識：初めて二字漢字動詞を体系的に考察し、その全容を明らかにすべく、全数調査を敢行し、信頼できる結論を得た。

（２）二字漢字動詞についてその発生上の類型に従い、典型例を詳細に考察した。方法論の確立により、個別事象として考察された事柄が東アジアにおける語彙の受容、環流というより大きな射程を得た。

（３）近代二字漢字動詞 2485 語について基本的な語誌記述を行った。それにより、日本語の辞書編纂のみならず、中国語、韓国語の近代語記述も正確さを期すことが保証されよう。

以上により、楊馳氏の論文は、研究の方法や内容、記述の体裁や論理など、すべてにおいて所定の水準に達しており、博士論文としてふさわしいものであることを、論文審査委員会一同が認めた。